

研究主題

基礎・基本の定着をめざした国語科の指導の工夫 量的側面・質的側面・学習環境の側面からのアプローチを通して

主題設定の理由

1. 学校教育目標の具現化から

本校では、「心身ともに健康で人間性豊かな児童の育成」を教育目標に掲げ、めざす児童像の1つとして「進んで学習する子」を設定している。これは本年度の重点努力事項である「学習指導要領に沿った学力観に立った指導と評価の改善」や「個に応じた学習指導の充実」により、「基礎・基本の定着と内発的・主体的な学習意欲の醸成」がなされたときに具現化されるものと考えている。「基礎・基本の定着」と「学習意欲の醸成」は密接な関係にあり、「できるから、分かるから、もっとやりたくなる」「やりたくなるような楽しい学習活動だから、できる、分かるようになった」というように、双方を螺旋状に絡み合わせ高めていきたいと考えている。

特に、国語科はすべての教科の基となるものとして、母語教育としての重要性が指摘される場所である。そこで、国語科において、基礎的・基本的な内容と学び方の定着をめざした指導の工夫を通して、めざす児童である「進んで学習する子」の具現化を図りたいと考えた。

2. 今日の課題から

平成19年4月24日に実施された学力状況調査の問題は、読解力低下の議論のきっかけになったPISA調査の影響を強く受けたものであった。特にBテスト(活用)では「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力」「様々な課題解決のための構想を立て、実践し、評価・改善する力」を見る内容になっていた。この問題から「今、求められているのは、このような問題を解く力なのだ」「その力の育成のために授業の改善が必要である」という子どもや学校に対する強烈なメッセージを感じた。

さて、18年7月の中教審教育課程部会では「国語科の現状と課題、改善の方向性(検討素案)」という資料が提示されている。この中で、目標・内容の改善のために「言語の技能」「言語の知識」「言語の文化」「言語の活用」の4つの視点が提案されている。ここで重要なのは、国語科を「各教科等の学習の基本となる言語の教育としての立場から、実生活や実社会で必要な言語能力や、言語文化に親しむ態度などを確実に育成することを重視」している点である。

昨今の国語力の見直しの議論に盲目的に迎合する訳ではないが、ここで立ち止まって、国語科の基礎・基本とは何かを再考し、母語としての国語教育、技能教科としての国語教育の在り方を考え、それに即した実践研究を進めていくことで、一人ひとりの児童の基礎・基本の定着を図りたいと考えた。

3. 児童の実態から

本校は全校児童36名の小規模校である。児童は明るく素直で、指示されたことや与えられた課題には真剣に取り組む。これまでの5年間の基礎・基本の定着のための取り組みにより、「やればできる」「もっと難しい問題にもチャレンジしたい」と自分を更に高めようとする意識が見られてきた。平成19年1月26日に実施した「漢字検定」(日本漢字能力検定協会)では、2年生から6年生の24名の児童が受験して22名が合格した。

平成19年5月に加美町のすべての学校で実施した標準学力調査(東京書籍)の結果では、2年連続、すべての学年で全国平均(期待正答率)を上回っており、徐々に児童が力をつけてきたと言える。

また、平成19年3月に実施した「国語に関する意識調査」の結果からは、本校児童の素直さを読み取ることができた。「国語ではどんな勉強が好きですか?」の設問に対して、選択数が多かったのは、「図書館の本を読むこと」、「物語で登場人物の気持ちや場面の様子について考えること」、「作文や日記などを書くこと」、「国語辞典でことばの意味を調べること」であった。これらは、プロジェクトや授業作りで力を入れてきたことである。このように打てば響く素直

な児童が「国語が得意だ」と思うことができるよう、基礎・基本をしっかりと身に付けさせる責任を強く感じる。

一方、平成18年度の「宮城県学習状況調査」では、「読むこと」の正答率が他の領域よりも低いことが分かった。特に説明的な文章での内容の読み取りが不十分であった。保護者からも「学習した漢字を使っていない」「語彙が乏しい」「文字が乱雑になる」など、国語に関する児童の課題について指摘する声も聞かれる。また、大人数の前や改まった場で話すことへの抵抗感や話し合いの経験の少なさなど、小規模校であるが故の課題も多い。

4. これまでの研究から

本校では平成14年度から3カ年間「基礎・基本の定着をめざした算数科の指導の工夫」というテーマで算数科の学力向上の研究に取り組んできた。平成17年度からはそれに続き、国語科でも「できる」「分かる」を重視し、すべての学習の基となる技能教科としての国語の力を一人ひとりのものとして定着させたいと考えて本研究に取り組んできた。

初年度は、「言語活動の日常化」をめざして5つのプロジェクトを立ち上げ、児童にとって様々な形で国語に触れる機会を増やすための環境作りに取り組んだ。児童は毎日「漢字つみき」や日記、暗唱やスピーチに一生懸命取り組み、今ではそれらを頑張ることが当たり前のことになりつつある。

このような研究の進め方は、「基礎的な知識や技能から数学的な思考力へ」或いは「外堀から本丸へ」という本校の算数科研究のノウハウを生かしたものである。17年度の環境整備という外堀を埋める段階から、18年度は「読むこと」の領域について授業改善という学習指導の本丸へと研究の中心をシフトさせてきた。その取り組みの中で以下のような実践的な課題が明らかになった。

効率的な読みのスキルは必要ないか

「繰り返し読んだら理解できた」というのは当たり前のこと。そこから一步進めて、要旨や主題を効率よく読み取る力を育てていく必要がある。

「熟考・評価の力」を重視した授業作りを

「作者の主張をどう思うか」「この文章は分かりやすいか」などの観点での読みを実践してきたが、それに対する自分の考えを書くことを更に重視していく必要がある。

身に付けさせる言語技術の明確化

「この単元では、この言語技術を身に付けさせるため、この言語活動をさせる。」ということを意識して指導を行う必要がある。そのため、カリキュラムや各プロジェクトの進め方を見直す必要がある。

指導技術の向上のための具体策を

読解における「単元指導の基本展開」は「失敗しない授業作り」につながった。ただ、その展開を支える片々の授業技術の脆弱さが問題であり、具体的な解決策が必要である。

07/23 研修日資料「SOLUTION」NO30より抜粋

当初の予定では、3年次は「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域へと広げていく計画であった。しかし、上のような課題の解決を目指して、授業改善については18年度同様「読むこと」の領域に絞り、実践の累積を進めていきたい。

また、基礎・基本の定着をめざした研究の取り組みが6年の節目を迎えることから、これまでの研究のノウハウを3つの側面からのアプローチとして整理することも重要と考えた。

以上のような理由から本テーマを設定し研究に取り組むことになった。

研究目標

児童に「基礎・基本」を確実に身に付けさせるための、量的側面・質的側面・学習環境の側面からのアプローチの仕方を明らかにする。

研究仮説

国語科の学習において、以下の様な手立てを講ずれば、児童一人一人が「話す・聞く」「読む」「書く」力を身に付け、基礎・基本の定着が図れるであろう。

1. 「言語活動の日常化」の手立てを工夫することにより、児童が繰り返して言語活動に接する機会を保証し、言語技術の定着を図る。【量的側面からのアプローチ】
2. 読解力の向上のための授業展開を工夫するとともに、発問や机間指導などの授業技術を吟味することにより、よりよい授業作りをする。【質的側面からのアプローチ】
3. 教育課程、週時程の在り方や家庭との連携方法を工夫することにより、児童の学習環境を整える。【学習環境の面からのアプローチ】

研究の具体的手立て

1. 量的側面からのアプローチ 言語活動の日常化の工夫

各プロジェクトの取り組み

< 言語技術プロジェクト >

- ・「ことのはの時間」(毎週金曜、業前から1校時の60分間)における「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関するスキル指導の進め方の提案
- ・「ことのは」カリキュラムの見直し

< 読みプロジェクト >

- ・読みのスタイルの類型化(方法、ねらい、効果など)
- ・本読み、朝読書、暗唱活動の企画運営

< 漢字つみきプロジェクト >

- ・「漢字つみき」の進め方、評価の在り方についての提案
- ・「漢検」(日本漢字能力検定協会)の取り入れ方についての提案

< 辞典活用プロジェクト >

- ・辞典の使い方の指導法の提案と辞典が日常的に利用できる環境の整備

2. 質的側面からのアプローチ 読解力の向上のための授業展開の工夫

一人ひとりの読みを確実にするための工夫

- ・「ハテナ読み」により、読みの視点のおさえ方を身に付けさせる。
- ・「一人読み」により、教材文の内容や情報を読み取らせ、それぞれに考えをもたせる。

集団による考えの練り合いの工夫

- ・「読み深め」により、自分と友達の考えの異同に触れさせ、叙述を根拠にして話し合わせる。

考えを深め、広げるための工夫

- ・話し合いを生かして自分の考えを深めたり、広げたりさせる。
- ・主題や主張に対する考えを書く活動を位置付ける。

言語活動の積極的な導入

- ・読む目的を明確にし、音読や視写などの読みを授業に十分に取り入れる。
- ・単元の終末段階を中心に、発展・補充として多様な言語活動を取り入れる。

授業技術向上を目指した研修の工夫

- ・模擬授業形式による事前検討、「授業研究カード」を使った事後検討会の実施
- ・有効な指導技術の累積と明文化

3. 学習環境の面からのアプローチ 児童の意欲を高める環境作りの工夫

学習の場の設定と意欲付けの工夫

- ・基礎・基本の定着のための週時程の工夫と「ことのはの時間」の設定
- ・発表の場の設定を意識した集会活動や諸行事の見直し
- ・他教科、総合的な学習の時間との関連付けた発表や発信の場の設定

- ・地域と連携したイベントの企画運営（例：保育所での「出張お話し会」など）
- 家庭との連携の強化
- < 学術連携プロジェクト >
- ・国語力向上の取り組みについての啓発，PTA国語学習研修会の実施
 - ・「学習記録カード」の活用による家庭での見取りの強化
 - ・小中連携，保小連携など縦の連携作りの企画運営

4. その他のアプローチとして 児童の実態把握と評価の工夫
- 基礎・基本の明確化と個の実態に即した支援の在り方の工夫
- ・単元毎の評価規準を明らかにし，その達成のための方策を個のレベルで考える。
 - ・諸検査の結果や学習履歴を累積する。
- 自己の向上を自覚させる評価の工夫
- ・初めと終わりの自分の考えを比較することにより，考えの深まりや広がり気付かせる。
 - ・デジタル機器を活用して音声言語表現の評価を工夫する。

主題等のとらえ方

1. 基礎・基本とは

国語科の学習指導要領に示された目標，内容の全てである。

国語科では，「適切に表現する能力」と「正確に理解する能力」の育成を基盤としながら，「伝え合う力」を高めることを目標としていることから，これを基礎・基本と捉えることができる。

「伝え合う力」とは，「人間と人間との関係の中で，互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して適切に表現したり，正確に理解したりして，よりよい人間関係を築いていく力」であると考えられる。この力は，これからの情報化・国際化社会で生きてはたらく大切な力であり，人間形成に資する国語科の重要な内容である。その育成のためには「何を，だれに，何のために，どんな条件で，どんな方法を使って伝えるのか」を意識して「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」についての言語活動を行うことが必要と考えた。また，教育課程審議会の答申が，「日常生活に必要な話す・聞く，書く，読むなどの基礎的な内容を繰り返し学習し確実に言語能力を育成することを重視」していることから，国語科の授業だけでなく，他の教科・領域等においても言語活動が繰り返し行われるように意図的に指導をしていくことが必要と考える。

2. 3つの側面からのアプローチとは

本校では，基礎・基本の定着には3つの側面があり，それぞれの面からのアプローチが必要と考えている。

(1) 量的側面からのアプローチ

「できないことをできるようにする最も簡単な方法は，たくさん練習することである」ことは誰もが認めるところである。国語科に於いては，「話す・聞く，書く，読む」活動が毎日のように繰り返し行われる仕組みを作ることが重要と考えた。これが量的側面からのアプローチである。本校では，これを「言語活動の日常化」と呼んでおり，それを担うのが「読みプロジェクト」「言語技術プロジェクト」「漢字つみきプロジェクト」「辞典活用プロジェクト」の4つのプロジェクトである。

(2) 質的側面からのアプローチ

やみくもに練習するだけでは効率的とは言えない。よりよい授業作りをすることによって考え方や学び方を身に付けさせる質的側面からのアプローチは，やはり研究実践の本質である。

児童一人ひとりに自分の考えをもたせるための手立て，それぞれの考えを交流して読み深めるための方法として，本校では「単元指導の基本展開」を設定した。また，それを支える片々の授業技術を向上させることも，学びの質の向上のためには，きわめて重要な要素である。

(3) 学習環境の面からのアプローチ

教育課程，週時程，家庭の学習環境などを整えることを指す。特に本校では，基礎・基本の

定着のためには家庭と学校の協力が不可欠と考え、「学家連携プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは、家庭学習の支援の仕方、音読や漢字つみきの進め方などについて体験しながら学ぶ「PTA国語学習研修会」を企画運営している。学習面での学家連携は、本校の1つの特長になりつつある。

3. 読解力とは

PISA 調査における「読解力」は、次のように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

我が国で従来一般的に用いられていた、「文章を読んで、その意味を理解すること」としての「読解」ないしは「読解力」という語の意味するところとは大きく異なることに注意する必要がある。それをグローバルスタンダードとして盲目的に受け入れる訳ではないが、2003年の調査から明らかになった、「テキストの中の情報の取り出しはできるが、その情報を使って考えることができない。また、記述式の問題で無回答が多く、書くことを苦手としている。」という日本の課題は、本校児童にもそのままあてはまるものであることから無視することはできない。また、目的意識や相手意識が重視される中で、「何のために読むのか」や「自分の考えを誰にどの様に伝えるか」は日々の学習の中で意識的に指導していかなければならない。

そこで、本校では読解力を4つの段階に分けて以下のように整理した。

第一段階「何が書いてあるか分かる」(内容理解の力)
第二段階「どのように書かれているか、どのように描写されているか分かる」(表現理解の力)
第三段階「筆者が何を言わんとしているかを指摘できる」(主題解釈の力)
第四段階「自分は思うか、どう判断するかが言える」(熟考、評価の力)

授業作りでは、それぞれの段階の読んで分かるを実現させるために、どんな手立てを講じるかを明らかにすることが重要である。

4. 言語活動とは

言語活動とは、国語の指導内容と子どもたちの学習活動との関連を図り、国語科授業の効果を上げる学習活動である。現行の指導要領の内容の取り扱いにおいて「(1)内容の『A話すこと・聞くこと』、『B書くこと』及び『C読むこと』に示す事項の指導は、例えば次のような言語活動を通して指導するものとする。」と具体例が明示されていることから、「話すこと・聞くこと的能力」「書くこと的能力」「読むこと的能力」を育成するための主たる方法と捉え、指導にあたるのが肝要である。

さて、本校における「言語活動の工夫」とは、児童が、相手意識、目的意識、表現や理解についての方法意識などを具体的にもてるようにするために、学校や児童の実態に応じて活動の内容や方法などを工夫することである。例えば、教材文の構成や表現に倣って文章を書くなどの技能定着を主目的にした活動や、学校や地域の行事や総合的な学習の時間等との関わりを考慮して、発表や取材活動を位置付けることなどが想定される。

また、「言語活動の日常化」とは、言語活動を授業だけでなく、業前活動や帰りの会、家庭学習の中に位置付け、繰り返して学習できるようにするものである。これは、目標・内容を2学年のままとりまとした「国語科の指導内容が、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しの学習を基本としている」という考えに基づいている。尚、漢字の読み書きや国語辞典の活用など語彙を広げる活動など言語に関する指導事項についても繰り返しの学習が重要であることから、言語活動の一部と位置付け、その日常化に力を入れていく。

研究の経過と計画

1. 研究の経過

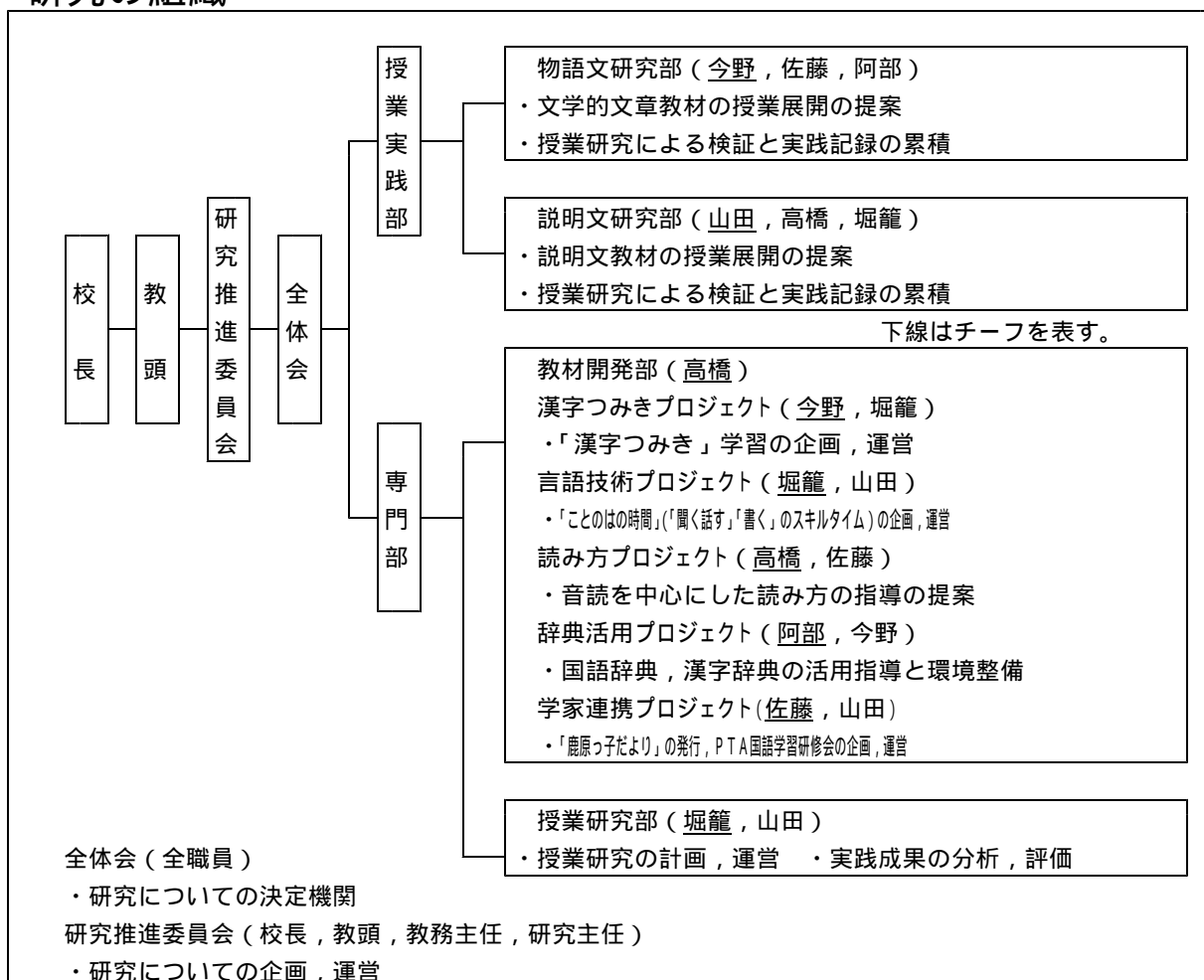
<p>1年次 17年度</p>	<p>言語活動の日常化のため、各プロジェクトを中心に枠組みを構築する。</p> <p><漢字つみきプロジェクト> ・「漢字つみき」ユニットの開発と修正 ・漢字検定の実施</p> <p><スピーチプロジェクト> ・スピーチテーマ集の選定とフォーマットの作成 ・聞き方、メモの仕方 ・主張と事実の明確化</p> <p><読み方プロジェクト> ・朝読書、読書リレー ・音読、朗読 ・読み聞かせ、ブックトーク</p> <p><作文プロジェクト> ・日記による書くことの習慣作り</p> <p><国語辞典プロジェクト> 18年度は「辞典活用プロジェクト」に変更 ・国語辞典の使い方の指導と環境整備</p> <p>国語科における指導方法と評価の在り方を工夫する。 ・プロジェクトとの関連を考慮した授業実践を積み重ね、授業と日常の活動との関連の在り方を探る。</p> <p>国語力向上モデル校を中心に先進校の研究実践について研修を行う。</p>
<p>2年次 18年度</p>	<p>「読むこと」の領域の指導方法と評価の在り方について、児童の読解力を向上させるための学習の在り方を工夫し、授業研究を中心にその効果の検証を行う。</p> <p>・文学的文章教材、説明的文章教材の単元全体の基本的な学習展開を構築する。</p> <p>各プロジェクトの取り組みを中心に、望ましい学習の仕方を明らかにし、全校で統一した学習の展開を日常化することにより、それぞれのスキルの向上を図る。</p> <p>家庭との連携を強化し、国語科の望ましい家庭学習の在り方について啓発する。</p> <p>・家庭学習5点セットによる家庭学習の習慣化 ・PTA国語学習研修会の実施</p> <p>研究の経過と成果について中間発表することで、広く指導助言を受ける。（「授業作り研修会」「ミニ公開」の実施）</p>
<p>3年次 19年度</p>	<p>前年度の課題を踏まえ、「読むこと」の領域について継続して研究に取り組む。「単元指導の基本展開」について、それぞれの段階の指導の仕方をまとめ、授業研究を中心にその効果の検証を行う。</p> <p>授業研究において、児童の学びを支える片々の教育技術の共有化を図る。</p> <p>各プロジェクトの取り組みを評価し、内容と進め方を見直す。「ことのはプロジェクト」を「言語技術プロジェクト」と改め、言語技術の育成を目指した改編を図る。</p> <p>研究の成果をまとめ、公開することで、広く指導助言を受ける。（「授業作り研修会」「公開研究会」の実施）</p>

2. 平成19年度の研究計画(校内研修内容)

月	・校内研究全体会の内容、 実践内容	現職研修の内容、 その他
4	主題、目標、仮説等の確認 研究公開のイメージ作り 各プロジェクトの進め方の検討	コンピュータ活用研修（デジタルポートフォリオについて）
5	全校学力テスト（国語、算数）の実施 授業（3、4年生）事前、事後検討会 授業（5年生）事前、事後検討会	読書指導研修（講師：吉田よし子先生：読み聞かせボランティア）
6	指導主事訪問時の授業の事前検討会 授業（2年生）事後検討会（指導主事訪問と同じ単元で）	

7	・指導主事訪問（7/4：B訪問 全員国語の授業） 指導主事訪問の集約 公開授業の指導案作成	P T A 研修会（「ことのはの時間」の模擬授業：テーマ「説明しよう」）
8	8/21授業作り研修会（公開授業の指導案検討） 相澤秀夫先生の模擬授業，実践協力者との授業作りワークショップ 研究紀要プロット・原稿作成	各種研修の伝講会
9	公開指導案最終チェック，模擬授業 研究紀要読み合わせ	「朗読のすすめ」（劇団民芸の鈴木智氏を迎えて）
10	ポスターセッション準備 10/10公開研究会	
11	授業（6年生）事前，事後検討会 P T A 国語学習研修会 準備	
12	授業（1年生）事前，事後検討会 1年生の「漢字つみき」スタート	書き初め実技研修 P T A 研修会（「ハテナ読み」「一読み」って何？）
1	実践記録，各部のまとめ作成について	
2	「漢検」（準会場）の実施 研究のまとめについて 研究集録作成作業	
3	次年度計画について	

研究の組織



研究の全体構想図

